世界婦人

●本誌は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

本號目次

△恭敬畏縮は美にあらず 堺利彦（一）
△婦人解放問題雜感 深尾韶（三）
△是れ一個の寄書 門田耕雲（五）
△雜錄 守田有秋（六）
△友への返し ひで（一）
△我が家庭の者を迎ふる かなめ（三）
△狭隘詩 渡邊博（六）
△海外時事（二）
△海内時事（二）
▲小說志士の末期 二葉亭四迷（四）

恭敬畏縮は美に非ず

堺利彦

式日親戚の家に祝事ありて晩餐に招かれ食卓地の汚き我輩も、儀式だつた御馳走には少々閉口しながら參上したるに、來客の男女は何れも皆な羽織袴、紋付丸帯の辨へにて、綺羅星の如く廣座敷に居並びたり。扨、改まりたる挨拶も濟み、酒も二三四行、皆々ホロ醉の上機嫌となりたる頃、むきゝたる主人方の何某君より、今はとて羽織袴脱棄の動議提出せられ、一同之に賛成して大きにくつろぎ、序の事にとて胡座御免となり、ヤレ〳〵是でこそ、いざ改めて一獻、など、盃はいよ〳〵周り、一座今更に賑ひたり。

其時、我輩も御免を蒙りて胡坐をかきながら、フト氣づきたるは御婦人連の事なり。男子連が皆々打くつろぎたるに關せず。御婦人の皆様は前の如く其四角に坐り居たまへり。予は如何にも不公平の事なりと、少しく不安を感じかけたり折しも、是も我輩と同様の點に氣づきたる御人ありて、「いかゞです、御婦人方も一つ胡坐でも御かきなすつては。ヘツヘヽヽヽ」と打笑へり。一同も是に和して打笑へり。御婦人方も是に對してオホヽヽヽと輕らかに打ゑみたまひたり。

一座は此件に關して、是以上何等の考慮をも費さず、皆な樂しげに半宵の良夜を過せしが、我輩は永く其の當時の不安の感を忘るゝこと能はず。

婦人は何故に胡坐をかくの自由を有せざるか。論者或は曰はん、是れ美の爲なりと。嗚呼果して美の爲なる乎。美は直立の間にも在り、美は腰掛の間にも在り、美は寢轉びたる間にも在り、美は横坐りの間にも在り。美は決して端坐の間にのみ存する者に非ず。勿論、端坐正視は時として大いなる美觀を呈すべし。我輩は鎌倉の大佛を見て常に其の端嚴の相に驚たる、而も恭敬畏縮自由の態なく、自然の趣なき、今の婦人の端坐に對しては、曾て多くの美感を生じたる事なし。

又若し論者の曰ふが如く、必ず端坐を以て美なりとせば、何故に男子も亦た其美を現ずるを勉めざるや。論者或は曰はん、男子は剛健を以て質と爲す、故に胡坐却つて之に適すと。嗚呼果して然る乎。然らば男子が時あつて、（例へば王公貴人の前に出でたる時の如き）、其の謂はゆる本質に適せざるに係はらず、其膝の痛きを忍び、其足の痺るゝを忍んで、猶且つ端坐正坐を事とするは何ぞや。

論者は此に於て若し笑つて曰はん、汝何ぞ事を解せざるや、是れ禮の爲なりと。而して禮の一語には頗る高尚の意義あるが如し。而も暫く其の眞相を觀れば、畢竟是れ劣者優者に對する恭敬畏縮の態度に非ずや。論者は禮の一語に於て其眞意を白狀したりと謂ふべし。

然らば婦人の端坐も亦た只だ禮の爲のみ、優者強者なる男子に對する恭敬畏縮の態度のみ。自由の態なきも其筈なり。自然の趣なきも其筈なり。何の美か之れ有らん。若し猶ほ強いて其間に美ありとせば、そは只だ屈從の美、奴隷の美、無氣力の美ならんのみ。

斯くても猶ほ世の多くの婦人淑女方は、男子の暴威の下に其足を痺せられ居るに氣付き玉はざるにや。而して彼の晩餐の一座に於けるが如く、寛大なる男子が面憎くも「いかゞです、御婦人方も一つ胡坐でも御かきなすつては」など、嘲笑侮辱するに對し、只「オホヽヽヽ」と輕らかに打ゑみて止まんとし玉ふにや。

閑窓錄

神川松子

▲夢

夢に見し影を現にとらへんとして悶へ苦しむ吾人の心情又憐れにあらず哉、固より現世に於て我が戀もなく、將た影もなし、唯夢に、あゝ、唯空き夢に、忽焉純美の影を見て、憧憬の念は、いつしか戀を孕る、悠久に破れざる變らざる戀をかたる。

友への返し

ひで

お手紙拜見しました、お本人が斯くおあきらめなさるのに私共が無論騒ぐ必用はないのです、基督の教を守り云々との御意見誠に宜しきお考へと存じ候へ共現社會の牧師、傳道師の口吻を眞似て僞善者にならぬ様御心掛け肝要と愚考仕候智見に眠らされざる宗教道德は却て人類社會の發展を妨げ之を害するものである事は卓見の士の唱導する處にて御座候あなたも罪を人に歸せず先に角自分の行爲如何を御省みあらまほしく、基督の御名の下に隱れて自身を修養せざれば矢張り今日の如き宗教家に陷落人士の續出を見るのみと相成り申候今日の宗教家は罪をイエスにのみ嫁して只天國の説を信じ其價たる十字架を荷ふ事を思はず懺悔をのみ熱望して患難を願はずに居るのです、あなたが此頃の迫害は唯名空實に徹々たる我利我執の念を脱するに能き試煉場です神はあなたに現代の社會を知るの好期を與へ玉ひしものならんと愚考致し候へば此機を逸せず只管修養に御心掛けわらん事こそ望ましく候角くとくも終りに一言致し置きたきは現代の宗教家道德家と稱する者は只管教祖の口吻を眞似るに巧にして決して殉難の實を負はん覺悟あるに非ず畢竟一個の舞台よき俳優師である事を御記憶あらん事を併し御身は只々傀儡で終らるるを願はされば愛に眞に現代社會を解釋し玉ひて此の不義惡德の世を救はん御覺悟ありてこそ○○翁の愛顧にも報ゆる御身の責なれと愚考仕候今日の如くにして御身の醉生夢死は吾が友としての希望に非ず能々御含味被下度御子息様の將來實に懸念に堪へず候へ共今は私も三面六臂を要する身の其處迄はとても手は届き不申御身は先づ母としての責務を怠慢にし玉はぬ様祈り上候眞に利己てふ大敵を逐ひ拂ひ玉はゞ何の迫害も恐るゝに足らずと存じ候安逸を貪らんとしてこそ人の嫉妬、惜しみ迫害は來るものに御座候昨日は○○社に参り非常に面目を失ひ申候隨分今回は御身の爲め迷惑致し候へ共取消し請求なしとあれば○○翁の御名譽も汚さず私も相關せず大きに安心仕候本日○○氏へも御書面の趣きを話し○○翁及び私も關係せざる趣きに相話しおき候間或は新聞の惜哉上繼續致し候はん之は餘儀なき事と愚考仕候呉々も御遜に謙遜を旨として萬事に御油斷なき様吾も油斷多き身ながら老婆心申上候早々頓首

七月十日

捨小舟

沐孤泉

○
離れ合ひし幼き夢の跡斷えて
星夜に二人語るたのしさ。

○
我君の心床しきみ姿を
ひとしほ思ふ今日の夕ぐれ

○
我君よ心變らで長しへに
幾年月を愛でしあはめや

○
千早ふる神代も知らぬ伏屋にて
飢えたる友の嘆つ聲きく。

○
月明くかもめ鳴きつる池のべを
友とさすらひさ夜ふけにけり

○
我庭に移り匂える若紅葉
こひしき君の心しのべや

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まさる可からず

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

内外時事

女子と男子の競爭

女子が農業其他劇烈なる體力勞働に服するとは、米國に於ては歐洲大陸よりも比較的少かりしが近時其數合々増加したり、一九〇〇年には米國中農業勞働に從事する婦人は四十五萬六千人を増加し、比較的に婦人に適したる衣服業の勞働者より多きこと十二萬人に達したりと謂ふ、又た女子にして冶職に從事せる者百八十五人、機械職工は百八十人あり、[illegible]に至りては最も腕力の必要なる汽罐の製造に從事するもの八人あり、其他機關車の運轉手及び火夫四十五人、鐵道のブレーキメン三十一人、同じく鐵道の信號人十人、旗振り及ポイントメンの鐵道事業に從事せる者も一作て全然男子の獨占に屬せし三百二十九種の勞働中、一九〇〇年の調査に依れば實に其九種を除くの外は女子の競爭を見ざるものなきに至れり、然して其九種の勞働とは合衆國の兵卒、水兵及び船員、市消防人、及び電信電話の線路工夫の如きものありと謂ふ、

由來男子が女子に對して對等の權利を拒むの口實は、女子が男子に比して智力と體力に於て劣る所ありと云ふにあり、然るに社會は此言葉の下より、從來男子專屬の職業なりとせられし劇烈なる體力の勞働を女子に課しつゝあり、女子が男子と對等の能力あるは腕力の方面にあらずして智力の方面なるに、今日の社會は女子が智力に於て男子と競爭せんとするを拒み、却て腕力の競爭を強ひつゝあり、之れ現今の社會組織の矛盾を語れる、趣味ある現象と謂ふべし、

女子は永久に奴隷なるか

現今の女子が奴隷の如く男子に服從せるは人間自然の狀態なるかの如く信じて疑はざる者あり、されど原始社會の研究は反て之が反對の事實を證明せるものあり、今其一例としてアクゾナの山地に今尚ほ一小別世界を造れるホピスはインヂャンの一種族なるが、彼等の社會には貧困もなく、監獄もなく、養育院もなく警官もなし、犯罪とは彼等の間に全く知られざる言葉なりと謂ふ、何ぞ知らん此ホピスの社會には女子が家屋や家具の如く男子の所有物たる社會にはあらで、反て女子は勢力ある社會なり、家屋其他の財産が女子の所有權に屬せるのみか、婦人は即ち一家統治の任に當れり、斯く彼等は自由にして重大なる勢力の地位にあれども、然かも其女子たる自然の長所と美點を失ふとなく、身體の完全なる發育と共に其品性は頗る嘆賞すべきものあり、結婚の制度は現今文明社會に於けるが如く、男子の獨斷的見地よりせずして反て女子の見地に立ち、一寸文明國の法律家を驚かすに足るものありと謂ふ、女子が男子に治められて家内初めて太平なりと云ふが如き迷信より覺めて、一日も早く男子をも治めず、男子にも治められざる眞の自由を望んで女子の氣焰を揚ぐ可きなり。

佛國婦人と議會

佛國の婦人も男子の議員が如何に頼むに足らざるかを漸々と經驗したり、佛蘭西にては結婚したる女子が己れの働にて得たる給料は良人の干渉を受けずして勝手の目的に使用するを許す可しとの法案は、色々と形を變へて議會に提出せらるゝと既に十四年の久しきに渉れども未だ通過を見ず。されば今年の議會にも同一精神の法案は提出せらる可しと謂ふ。男子が人數の半數を占むる女子の利益に對して如何に不親切にして賴むに足らざるかは、佛國に於ても日本に異らずと見えたり、されば眞の婦人解放は女子自身の手に爲されざる可らず。

最も強き言葉

此頃米國に開かれたる婦人會議に最も大なる感激を與へたるものはメリー・アントニーが臨終の病床より此大會に送りたる書翰なりしが其文中には下の如き力ある言葉あり

權利を失ひたる婦人より女子を奮起せしめんが爲に、汝の知れる最も強き言葉を發せよ。女子の權利を奪ひて辱めつゝある男子を慚愧せしめんが爲に、汝の知れる最も強き言葉を發せよ。凡ての惡に勝るの惡は人類の母たる女子に權利を與へざる事也。女子に對する此不正にして除かれずんば男子は男子の間に正義を行ふことをも得ざる可し

●女工二百名の暴動

女軍建物を破壞す

群馬縣多野郡新町なる山十組製糸所は同縣にても最も大規模なる製糸場なるが本月六日の事同工場なる信州組の工女二百名雇主及び事務監督者の横暴を忍ぶ能はずして大擧し反抗し未明午前三時と云へるに一齊に奮起して逃走を圖らんとし上州組工女百名之に和し先づ工場四周の窓を破壞し金網を打破りたり同工場に取りては時ならぬ此暴動に一驚を喫し事務員等の數を盡くして現場に驅付けたるも女軍は二百餘名の大衆のこととなり且つは平素に於る幾多の抑壓が此の動機に依りて勃發したることゝて鎭撫の慰諭も一向に効を奏せず破壞力は益々猛々加り來りて平素は工女に對する恰かも獄卒の如き威嚴と横暴を事とせる事務員等も決死の女軍に對しては狂暴手段を用ふるに處なく結局悉く女工の請求の前に屈服するの已むなきに至り内上州組百名には製所を退去することを許し殘る信州組二百名には相當慰安の途を與へて纔かに鎭定を計り殊に外出者工女に對しては凡ての未了問題を帳消しとするを以て内部の事實及び今回暴動に關する事實に付ては極力秘密を保ち與れとの要求ありしと此要求こそ之だけの椿事が一週間世上に秘密に付せられし原因なりしなれ而も今回の事件發生の因は同所の就業時間が午前三時より午後七時までと云へる十六時間勤務の虐待と飲食物の粗惡と工場衛生の完備し居らざることが一般的問題にして此の以外に個人關係に就ては事務員暴戻の結果が猥褻にするに忍びざるものと又此種の強制に從がはざる工女に對して故意に陋劣手段を取りて種々の不利と苦痛とを課したるを含みて勃發せるものとの二種ありと云ふ

如上の事實を見て如何なる屈從にも堪へ得る女子と輕視する勿れ、二十世紀は婦人解放の時代なり、聞く昔し佛國革命紛亂の當時、革命志士のバスチール獄内に在るや、其妻女は死力を以て、ダントン、マラーの徒に與し、世界無比の堅固を誇りし、さすがのバスチール獄を粉碎して、其父たり夫たる人の旦夕に迫りし死を救ひ多年貴族の横暴專制を懲して、終に共和の基礎を永しへに建てたりとかや、吾は此記事を見て佛國革命當時の婦人が如何に悽絶なる奮闘をなしたるかを瞑想するのである

●悲慘なる情死者

埼玉縣比企郡小川町大川村大字[illegible]萬五郎の三女一キヨ（廿二）は同村の馬場佐内方雇人富山縣生れの島谷由太郎（廿七）と疾くに言ひ交したるに父萬五郎は雇人風情のものと見くびりてか、兩人の出奔を遮斷して是を捕へきよ子を連れ歸りて同村宮岡某入方に嫁せしめたるにきよ子は由太郎の事忘れ難く遂に情死するに至る、嗚呼不自然なる舊社會に生れたる時勢の不幸兒、きよ子は悼むべきかな、舊道德舊習慣を打破せざる限りは、吾等女性の身に纏綿せる惡習慣はいつ迄も脱せられ不幸なる社會の如き家庭の壓制を是認するの間は、將來幾多斯る悲劇を演ずるに至るは當然の事となし候、きよ子が其名の淸き戀愛に身を捨てゝ、其愛を全ふしたる勇氣は、富豪の結婚政略に犧牲となりて醉生夢死する所謂當世の男女子の薄志弱行と比して如何に貴くや候はんや、斯る道德的習慣に縛られつゝある婦人の身ほど悲しきものは無之候

●派遣女教師養成所卒業式

東洋婦人會清國派遣女教師養成所第一回卒業式は去る廿六日午前七時より麹町區永田町鍋島侯爵邸に於て擧行せられたり、即ち先づ會長鍋島侯爵夫人の告辭卒業證書授與、清國公使楊樞、岡部子爵夫人の演説、卒業生總代大杉花子孃の答辭あり午前十一時式を終りたりと、尚卒業生は、順次渡清せしむる筈なりとの事なるが苟も一身を提げて海外に航し未開國の子女を薫陶するの任を負ふ其大膽や驚くべく而かも此重任を青春の一處女に托する當局者の無謀も又甚だしと謂ふべし、吾は教育家といふものは教育勅語を暗誦するのみで足れりと思はず、眞の人格を備へし人にして始めて人の師表たるを得ると思ふて居る希くば、近日渡清せらるゝ女教師諸氏よ先づ御身等自身の周圍に纏綿せる惡法律惡習慣を破りて、其の天性使命を研究し而して徐ろに其使命に赴かれよ、物品を製造して之を輸出すると は、其趣きを異にす、教師てふ事は、實に人生の最大要務なればなり、

●編輯室より

此程或文士を訪問致しましたら、朝鮮問題が、大分八ケ間しいではないか、御身は朝鮮問題で海外に名を轟かした婦人だから、此際も一度朝鮮にいつて、首鼠兩端を持する彼國を一刀否一塊の下に降伏せしめては如何、それこそ、行はれもせぬ社會主義を稱へるより、遙かに優れり[illegible]是につけても思ひ出しますのは[illegible]今日の大阪事件[illegible]朝鮮人民を塗炭に苦しめる[illegible]を亡きものにして[illegible]ではない、矢張り我々と同じく自由の大義と民權の伸張すべきを知らしむる覺悟でおし吾が思ふ如く行はれば[illegible]などは廢して共和の獨立國位にはする積りであつた、決して／＼日本の屬國なぞと、そんな潛越な驕慢無禮な思想は決して持つて居なかつた、それゆへ今日の如き膨脹論には服することが出來ぬ、況んや帝國主義は罪惡で固結して居るのですから、それに賛成は出來ぬ[illegible]きは此頃諸新聞氏の朴泳孝氏を評するの慘酷なるに驚くの外はない、今回の朴が行爲を非難する人士にして、不忠の極ではないかと思ふ、志士の爲として、一私人の恩惠に身を委するか、困難に殉する事が出來るか、是れは明瞭なる見解を[illegible]に與へる事[illegible]ト氏今回の[illegible]我國に對して忘恩の人たらんも、しかし彼は[illegible]慨家として、今度の行動は[illegible]彼れの人格を表はした者ではなかつた[illegible]今日の境遇には同情せずには居られ[illegible]此頃同一樹の涙に沈淪するもの[illegible]社會に成効するものこそ[illegible]忘恩者、[illegible]不義者である、[illegible]地上に容るゝを見る事の難きか、古來革命家として[illegible]覺悟ではあるまいか

○尚次回から[illegible]原稿[illegible]掲載[illegible]

[illegible]愛讀者諸氏の諒恕を願ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人解放問題雜感（一）

深尾韶

◎婦人解放問題といふ事については、吾人は常に研究を怠らぬつもりである。その研究考案の結果を多少筋立つたものにして發表して見たいとは思ふけれど、どうも早速には纏まらぬので、きれぎれながら、思ひついた事でも書きつけて見る。

◎先達てフインランドで婦人議員の選出されたと云ふ報道が達したとき、日本の男子は稍や色を作した如くであつた。それも例の婦人奴隷主義者に在つては、別に異にするには足らぬけれど、何も進歩した我が社會主義者の内にも之を喜ばぬ人がゐると聞いては、其儘に捨て置かれぬ。

◎此の婦人議員を喜ばぬ人の言ひ草を聞くにどうも男子ともあらうものが婦人の支配を受けるとは心外千萬だと云ふのだ、然らば婦人も亦「女子ともあらうものが男子の支配を受けるとは厭だ」と云つたら如何する。詰り支配を受ける受けぬはお互の事で、婦人議員が選出されたからとて、今迄の男子支配權が全く女子に奪はれた譯では無い。唯た男子の専制専横が制限されて男女共同、最と言葉を砕いて言へば、男と女と相談づく、と云ふ事になつたのである。

◎婦人議員を喜ばぬ男の議論は更に轉じて男女不平等論に移る。男と女はジタイが違つて出來てゐて、決して平等のものでは無い。然るに女權論者は何も蚊も婦人の肘を持つて、政治といふ事にまで嘴を容れさせやうとするが、是は大變な間違である。體質から腦の目方分量から生殖器官から、女は當然女の職分として爲すべき事が極まつてゐる。女には育兒、家計といふ大事な任務があるでは無いか、それを捨てゝおいて、飛んでも無い政治などに手を出すとは之を誤まれりと言はずして何と言はう。こんな事をして居やうものなら、仕舞には男ともつかず女ともつかぬ中性のものが出來て、世は亡びて了はねばならぬ。と。

◎此の議論には非常な誤りが既に其根底に存してゐる。第一が政治と云ふもの丶意義の誤解である。政治とは決して東洋豪傑が世界を併呑し、天下に覇を稱し、又四方を經倫すると云ふやうな事では無い。政治とは一團の人々の爲に臺所の世話を爲すとに過ぎぬ。五人の一家を營むのも政治なり、四千萬人の一國を料理するのも政治である。若し家計家政を以て婦人の專らなる任とするならば、當今の男子は却つて婦人の爲すべき所を奪つてゐるのである。さればこそ一國が旨く治まらぬのであらう。又婦人の體質腦力の不足を以て政治に適せぬものとしたならば、當今の男子は確かに、爲すべからざる事を強いて婦人に爲さしめつゝあるものである。一國の經濟が運用の出來ぬ人に、どうして一家の經濟が立てられるか。此議論から行けば世の男子は一日も早く女子の手から臺所の仕事を奪つて之を取らなければならぬ。育兒といふも同じく非常な力量を要する仕事で、一國民の行政立法の世話が出來る位ゐの人でなければ安んじて之を任す譯には行かぬ。それほど不安心なら、育兒といふ事も今日唯今より男子が引受けるが善い。

◎子を育てる事は婦人の非常なる負擔には違いないが、此負擔あるが爲に他の事は一切出來ぬといふ事は無い。又外の事をしては惡るいといふ道理は無い。成程今の世では、子育ての婦人は非常な時間と勞力を取られて了つて、他の事は一切出來ぬといふ風であるが、此狀態は何も永續させねばならぬ事は無い筈だ。育兒は一面から言へば婦人の唯一の慰藉かも知れぬが、一面から言へば又掩ふべからざる煩な面倒な仕事である。此厭な面倒な仕事を輕減するとが出來たならば婦人は何程滿足幸福になるだらう。然して幸ひな事には、婦人全體が何時も間斷なく生殖してゐる譯では無くて、休む事もあれば全く生まぬ人もある。是等の人の助けを借りてすれば、母の勞力は少くとも半減する事が出來るに違ひない。其餘暇を以て育兒以外色々の事をするのが、婦人の心を朽ちさせぬ唯一の途で、又實際誰も然したいと思つてゐるではないか。

◎予の見る所を以てすれば、體力や腦力が不足したからとて生活する權利は同等な筈である。同等ならば臺所の相談から除外される理由は少しも無い。故に婦人の參政權を得る事は至當の事である。況んや腦力の如きは今まで累代用ひなかつたが爲に退化したもので、これから社會に出て仕事をしたり教育が普及するに從つて男子同樣再び元の通り同等の進歩を爲す事の出來る見込みあるに於てをや。

◎若し論者の言ふが如く、女は生殖器官のみ發達して善いものなら、生物進化の理法に依つて、將來の婦人は腦が今の半分にも減り、二と三と加へれば五になるといふ樣な理會力をすら失つて、其代りに目鼻耳は唯男子を探し求むる爲に非常に鋭くなり、『あら一里先に男の臭ひがしてよ』とか『あの婦の向ふには美い男が三人で何か言つて居るわ』なんど云ふ飛んでも無い事となり、横隔膜の下から恥骨の邊まで子宮や卵巣で一杯になると云ふ樣な騷ぎが起るであらう。こうなつた日には啻に男子の相手にならざるのみか、何を云つても生殖の話より出來ず、一週に五人も六人も子を産んでも、其の教育すら叶はぬ事になつて、軈て其結果は人類の滅亡を來さねばならぬ。婦人は生殖より外の事に口出をしてはならぬなど云ふ人は、少し此處を考へて見るが善い。

◎餘白が無いそうだから、今度は此位にして置いて追々と色んな事を書いて見やう。

我が從弟の君を送る

かなめ

さらばよ

君遂に出で立ち給ふ乎

小生は只み神のみ旨とことはに君の上にあらんことを祈る

君はすでに忘れ果て給ひしならん、十年の昔し、回顧すれば邪もなかりし其のおりのこと、藹然たる氣韻に滿ちて、小生は此の俤きハートにもつゝましき血の緣の如きを感ず君は七才、我れは九才、一つ家に住みなれて、共に櫻町小學校へ通學し世の事人のこと事さら思ところなく只活動することのみ知りたりしよき小兒にてはあらざりしか

君よ、君は今滿洲の野に赴く、希くば自愛せよ、折りにふれては母在す國の春秋を忍び出で罪なかりし時代の記憶をも辿り、一歩なりとも、この幸ある道をはずし給はざれ、君の前途に光明、白々たる道路の一條横ふるあるべし、希くば挫折せず惑はずして進み給へ、

君の母上は君の故になやみまどひ給ふ、君が母上は、君が何にかゝわれ成功せられん事をのみ祈る、君よ、今や君は他事なく己の道を啓發し給ふ君と上乘なれ、いづちにあるとも、君は常に君が母上の苦心を忍び出で、在せ、君と共に、君の許に影の如くつき添ひて、共に悲しみ共になやみ共に笑ふものは、只母上その人より他にはなし遠く放れて、此の事を思ひ知り給はむ、君よ、さあれ君は一人して、なれぬ旅路に上り給ふ、先づは道行きこそ大事なれ、浮世の道未だ瞭せざる君なれば凡て物事にふれたりて冷やかなれ、甘き舌、にこやかなる笑は、兎角に人の道を惑はすもの、君は自ら暖かなれ、されど、事にあたりては眼を涼しく持ち給へ、いかで忘れ難きは共に一家に住みなれし年月の緣しよ云はずもあれ、我れが君になしたる惡しき業の幾多、今日とてはひとへにゆるされよ小生は君に對する惡しき感情の一つもあるなし只己れの罪多かりしを自ら知れるあるのみ

小生は君の知れる如くクリスト者なり、されど日毎日毎、悔恨の朝な夕なを送る不眞面目なる汚物なり、人に對するに自ら愛惜をつかす言行を以てし自己に對する傲慢或は卑怯等の自發精神に向つては最とも不忠實なる僕てふ感激に、より常に腦と神經とを自ら磨らすポーロの所謂、我れの願はざる惡を日に夕になしつゝ、ひとへにクリストに據らんとする不貞漢なり、小生は此の絶望の淵を通して一點かすかなる光りを見るが故に生き靜かなる細き聲の呼ぶあるが故に、向ひ、進行を續行せり、却て知るまことに試練の時は今なり、人間の努力、意氣いづくまで堪ゆるものなる乎君よ我れ等は死するまで奔走せざれば、我れ等の價値そのものは知れざるなり、君よ、何にはこもあれいかなることに彷徨するとも恐れず、進路を辿りたまへ、碎けるまで奮進猛進し給へ、君の心中より眞になさんと念じたる事をなし玉へ、結果は既に豫想すべからず、只奮闘するにあるのみ、勝利は外にあらはさんとすれば必ず失敗に歸す、君は、心不亂の中に勝利を得む己のが一念の安危に關しては只獅子の如く戰ふあるのみ、終りは此の世に勝てりてふ偉大なる自覺に至つて君は永遠に任在せん、一つの空想は千の空想を生みて空し、されど勝利の事實は只一つなれども永恆に變ることなし

小生は此の事實のために出でんと思ふなり君も亦此の明暗々たる心室の一途を驀進せよ、再び會するの時、互に手を握つて、たゞ笑むの日はいつ乎、小生は下に因んとせし事を日はず、浮さらんとせし事を默筆せり、多々の冗語をゆるし給へ、別れとは元より心侘むものなれば

終りに又君の健康と、勝利とを祈る

故郷に在る我れを忘れ給はされ、別れの時は破れうするとも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

志士の末期（承前）

二葉亭主人

中にも忘られぬは七十九年の八月オデッサへ行つた時の事である。其頃例の名高かつた二十八人組事件も漸く裁判終結して、五人死刑に處せられる事となつた。その中ウヰツテンベルグとロゴーウエンコの二人はニコラーエフへ護送せられて、其處で死刑に處せられ、オデッサで絞罪になるのはチウバーロフとリゾグーブとダウヰーヂエンコの三人であつた。

處刑の當日、朝夙く門を出て見れば、もう見物人は町を填めて往來も止まつた中を一輛の檻車が護送の兵に圍まれて、徐々と軋つて行く。罪人は皆灰色の獄衣の儘、後手に縛められてゐる。此方の端はチウバーロフで、瞬々と物思はしさうに、何方ともなく天の一方を諦視めて、默然として身動もしなかつたが、中央はリゾグーブで、これは又少しも惡びれた樣子はなく、元氣なもので、兩側の見物人の面をヂロ／＼と視て行く。向ふの端はダウヰーヂエンコで、其時僅か二十二の青年であつた。生先の長い身には死ぬのが辛いと見えて、始終晴れぬ顔をして、頸垂れてゐたが、リゾグーブが屈むで、微笑しながら何か其耳に就いて囁くと、ダウヰーヂエンコも莞爾と笑つて、面を擧げ、夫からは雨の雲を晴して、口元に微笑を含むで、平然として矢張兩側を眺めながら行つた。

刑場に着く。と見ると、絞首臺には柱が三本列んで、その弶の紐が風に飄々と飜つてゐる。臺下には粗木造りの棺桶が三つ据えてあつた。罪人を檻車から引卸して、獄帽を脱がせると、書記が進み出て、判決文を讀み聞かせる。それが濟むと、宣教師が十字架を捧げて側へ寄つた。チウバーロフが十字架に接吻するのが見える。で、罪人同士が告別の接吻を濟ますのを待つて、押丁がサヷンといふ屍の覆ふやうな者を銘々に頭から被せて、まづ、チウバーロフの手を引いて臺の上へ上らせ、弶を首へ掛けて、其端を柱に確と括り付けてから、リゾグーブの側へ行く。之を觀てゐる心持は何とも言へぬ。見物は皆悚然と總毛立つて、堅唾を呑むでゐると、リゾグーブは頭髪が弶に捕まつて工合が惡いので、首を擔かして其を直してゐた。と、押丁がチウバーロフの足下の臺を蹴退けると、其儘分銅でも釣したやうに、ぶらりと垂る。身悶もしない。次にリゾグーブの臺を退けると、これは苦しがつて藻掻いて紐がクル／＼と廻る。ダウヰーヂエンコは死を急いで自分と臺を蹴退けて、ブランコでもしてゐるやうに、久らく前へ後へふら／＼と搖れてゐたが、それも次第に弱まりて、遂に凝然となる。

もう見てゐられなくなつた。是からまだ三十分經つと、醫師の診察があつて、漸々絶切れたのを見究めてから、紐を切り棺へ納めるのであるが、それは見ずして宿へ歸つた、其時怨み骨髄に徹して、いつかはこの讐をと、固く心に誓つたが、其志しも空しくなつて、それから後も殉難の義人は幾人もあつたけれど、その人々の英魂を弔ふこともならぬ今の世に、今又自分が此監獄にして無念の最後を遂げたとて、この怨み何時の世にか晴らされやうと思へば、無念の切齒を禁じ得なかつたが、しかし考へて見ると、それも愚痴の至りである。かゝる非道の行はるゝ社會組織の缺陷は惡むべきも、此缺陷に生み出され、不義の空氣に育てられて來た人は聊かも惡むべきでない。眞理の光に接せぬる罪ありとすれば、盲人が太陽の光を見ぬにも亦罪ありと謂はねばならぬ。さればこそウヰッテンベルグは死ぬる時、遺書して同志が復讐など企てぬやうに戒めた。他の殉難の義人も皆それは一つ心であつた、と思ふと、今まで怨むものだに人を怨む我の愚かなるが恥かしく、心の蟠が釋然と氷の如く解け去る時、爽風自ら身邊を繞つて、主義の爲に一命を捨て、正義の國を此世に打建つる其礎の片端となる、身の果報のいみじさも稀有く、父母年の溫い心になつて、將來の光明を深く／＼信じて疑はなかつた。

夜は次第に更けて、稍曉方近くなるに從ひ、病勢は益々募り、足から冷え初めて、胸苦しく、頻りに血痰を吐いた。何となく次第に力が脱けて、果は折々精神恍惚となる。が、ふと又正氣に復つて、腦を動かさうとしては又恍惚となる。と、過去の記憶に、可懷しい顔に、妄想が烟の如く纏はつて、現に怪しい夢を見る。先刻から咽喉が乾いてならぬが、身動きが出來ぬので我慢してゐたけれども益々乾いて堪らぬので、思ひ切つて死力を出して、少し首を擡げ、やをら机上の土瓶を取らうとすると、クラ／＼として又倒れた。

倒れる拍子に心の底の方から湧出るやうに浮むで來たのは一生に一度嬉しかつた過し昔の夢で、其時彼はチブスの歿り際であつた。矢張今日此頃のやうに病みほうけて昏々としてゐると、玄關の戸がキイと開いた、次の間に忍足の音が聞え、荷と部屋の戸を推して入つて來る者がある。ふと目を開いて視ると、それは懷かしい其人で、今着いたばかりと見え、旅裝束で、小さな鞄を腋に垂げ、寢臺の側に差寄つて「まあ、お窶れなすつたわねえ……」と泪含むだ

……………

が、夢か、現か、正しく其人は其處に居る。其日のやうに、今も情けを籠めて凝と此方を視た目に露を宿してゐる。飛立つ程の懷かしさに思はず手を伸べて、戀しい／＼名を呼ばうとしたら、圖らずも情けない、皺枯れた呻聲が出て。其儘右手が頽然と寢臺へ墮れ、左手で夜被を攫むだのが僞然と緩いて、あゝ、もう、是迄の浮世であつた。

折柄廊下を通る當番の憲兵が、怪しい呻聲を聞咎めてふと立止まり、ト聽耳を引立て、ツカ／＼と戸の側へ歩み寄つて、例の孔から内を覗いてみた。久らく覗いてゐたが、軈て又戸の側を離れて、のそり／＼と廊下を行盡した處に控所がある。先程から其處に獨り茶を樂しむでゐた同僚の一人が、

「如何か？ 何號室の奴はまだ生きちよるかい？」

「うんにや、もう死んだやうぢや」と其憲兵は重たい腰をドッリと椅子へ卸した。

（をはり）

暗！默！

乙女同志の雜誌にあづかりて

荒涼たる哉此夕
青春沸る早乙女の
鮮血凝つて躍動す
慘殺たる哉このホーム
荒涼たる哉この夕
肉をも血をも將た愛も
エスの理想を犧牲に
慘殺たる哉この天地
荒涼たる哉この夕
窮して通ず鐵則の
前に射向ふ敵やある
慘殺たる哉この意氣や
荒涼たる哉此夕
神愁鬼哭啾々た
妖昭一睨三使徒や
慘殺たる哉此機密

伯爵樣へ

kk生

涼しき朝、里、角筈に訪づれすれば鬼百合高く聳るなり、木々のみどり影、爽やかなる庭の氣分あり、夏の最なかなるに天下に今日秋ばみて、心地すらすが／＼しく、急がしき人のめでたき日なりけり、世界婦人社の庭面は夢中に動じて、身動きだにせぬ草木、永遠に寂として緑のみ色濃し、訪づる主は居まさずとの事に悵然し僅を寄き置して歸途に就き侍りし沼子殺しの記事二度三度通讀致し、今はなか／＼に感情的ならざる御文章なることを覺え候、げに此の事實中に表はれざる幾多の悲慘、幾多の原因ある事に候はむ、されど夫良助なる人が生ことに其の妻に對して貞操ならず、現社會の惡弊に捕はれ全身全靈が既に惡に救するの力なきものとなり居り一家の肉的幸福も靈的幸福もなく妻なる人にし子は一家の行路難には心を惑はし夫の亂行には悲嘆に暮れ、我が子のいぢらしさには心氣を鬱らし浮世は一所に儚ならずかくて次第次第に内心に病し來れる此の哀れむべき行爲は遂に發裂して此懲悔を敢て演せしなりと云ふことは蔽ふべからざる較著なる事實なりと信ず凡ての罪惡凡ての悲慘は發作的に直ちに發起するものにあらず常に内心に於て育て上げられて後終に發裂するものなり、聖者に女を見て姦淫の心を起すものはすでに之れを姦淫せるなりと云ひ、汝等其の兄弟を怒る者は既でに之れを殺せるなりと云へる訓言は實に此の間の事實を明らかにす、然らば即ち此の女子をして此の悲慘を敢てせしめし者は誰れぞや、そは即ち夫良助の不貞操と、現世の厭迫これなり、而して之の良助をしかくせしものは誰れぞ、或は妻なる人の夫に對する平常の罪を云ふ人もあらむ、されど誰れも承認せざるべからざる事實は即ち、彼れ自身が人世に對する無自覺と惡現社會の強大なる厭迫これよ、然らば人世のあらゆる悲慘は皆之れ等二條件より來るべし、之れ誰れやらが議論なりき、又一方より之れを見れば斯くの如き一家庭内に於ける内事の悲慘はまことに御仰せの如く男女ともに何の覺悟なく己の心に知りも得ざる人と結婚して甘きホームを築かする事に候、然り而してかよわき女子に於ては何更に候べし、無論何井良助の如き人物に對しては微しき結合をなからざるべからず、唯女子として何等之に對して丈なる覺悟なからざるべからざる訓練の如くにして要は唯人世問題の啓發をうながすべきに候はむ、恐に付かぬ事を此の則年の痴呆が感せしまゝを、

社告

本月一日發行の十五號は先月來家内に取込みが御座いまして、何分私一人の夜を日に次いで奔走致せし甲斐もなく編輯間際に打ち倒れて、三日斗り編輯が遅れまし又爲め、印刷所の方にも其日割勘定が狂ひしと、所の印刷所なる人が鼻氣に胃されたとの事やらで、大蹉跌を成しまして、斯くの始末誠に愛讀者諸君に御詫びの言葉もなく、只々恐縮の外御座いません、あはれ、慈愛深い御方々、次號より編輯日誌を掲載して、[illegible]致して、斯く遅延せし次第を御聞に[illegible]致しますから、そを御覽の上、吾が身が如何に、後半生を、奮闘の犧に供しつゝある乎を御憐察の上、今日の罪を御許し下はりたし、尚ほ拙誌印刷も大工場は其筋の御睨みに恐れ、何處も印刷を斷られた爲め、[illegible]目下の印刷所に依頼致せる者、併し[illegible]の[illegible]ざるには、開口致し[illegible]何卒[illegible]

長く御愛讀の程願上げます

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

これ一種の凌辱

門田稲葉

博覧會の開るゝや、饑に泣きつゝあるものにして、美目好く生れたる婦女子は、一片のパンを得たり。彼等の中にて、多少の文字あるものは、女子看守人に採用せられ、假令眼に一丁字なしと雖も、目鼻立すらも優れ居る者は、爭ふて各方面に傭はれたり。彼等は、斯の如くにして、飢餓を醫するを得たれども、そは實に束の間にして、七月三十日博覧會の閉會と同時に、復びパンを漁らざる可からざる也、彼等に取りて、博覧會は寧ろ却て薄情けたる可し。而も、たゞに薄情けの感あるのみならず、是れ正に一種の凌辱也。

女子看守人は、如何にして採用せられたる乎。彼等は、就職難を喞ちつゝあるの時、喜んでその募りに應じたり。而も、眞面目に、之に依りてパンを得んが爲めに、生命を繋がんが爲めに、徴さるゝがまゝに、先づ履歴書を差出したり。既に自筆の履歴書を差出したる後ち、口述試驗の名の下に、容貌の美醜を見られたり。即ち容貌の美なるは採用せられ、醜なるものは合格せざりし也。女子看守人採用の要件は、たゞに容貌の美なるに在り、履歴書の如きは、眞に形式に過ぎざりしを以て、數次採用し或は補欠する際は、女子にして且つ容貌すらも美なれば、直ちに採用さるるに至りたり。されば、女子看守人の前身を調ぶるに、娼妓、藝妓、女中、淫賣婦、堕落女學生、女教員、未亡人等、その他、種々なるものありしなり。彼等は、大槪日給三十錢と、及びキャラコ黒紋附と紫紺の袴とを給せられ、朝七時に出勤し、夜五時に歸途に就きし也。即ち十一時間は、朝夕の掃除を除くの外は、顔を觀覧人に晒らし、濕氣ある館内に、或は立ち或は腰掛けて日を送る也。別段に勞働するに非らず、軀には頗る樂なるべしと雖も、終日顔を觀覧人に晒らし、ヨイショ美人！彼りや人三化七だ哩、とか口々に罵られたり。それすらも、既に同情す可きことなるに、撰抜されたる美人中の美人は、特に三十錢以上の日給を支給され、偶々給料支給の上に就て、不平を鳴らすものあれば、一喝の下に叱咤せられ、彼等の不平は、終いに漏らすに術なかりし也。加之ならず、守衛と稱する色餓鬼あり、監守と云へる誘惑者あり。常に、女子看守人の前に職權を濫用して喃々す。若し夫れ、この色餓鬼、誘惑者の意に随はずんば、彼等の地位は保ち能はざるを以て、薄夜手を提へて、恐る可き者の意を迎へたるものは、有夫の婦なると、處女たるとに論なかりし也。嗚呼、彼等は飢餓を醫せんが爲めに、恐る可きこの兩者、及び有力なる博覧會係員の爲めに、絶大なる凌辱を加へられ、なほ忍ばざる可からず。

更らに飲食店、及び賣店の女中に就て見るに、その多くは、一度び身を堕したものなりと雖も、中には、未だ處女もありし也。而も、資産を有するものの處女もありしが如し。最初傭主は、寧ろ高過ぎる日給を以て傭ひ、日に月に減じ、往復の電車賃を除去せば、剩すところなきまでに減じたり。彼等は、固より窮困なれば、傭はれたるもの也。然るに斯く減じられ、辨當料の損失を見るに至つては、彼等に取りての一大事也。故に、淫を鬻ぐの決心をなし、且つ之を敢てしたるもの多かりし也。翻つて資産あるものの處女は、何の爲に變裝して出でたるや、定めし兩親や、父兄には心算ある可し。更らに興行物を覗けば、婦人が肉色の輕羅を身に纏ひ、而も、その輕羅は、軀の肥腴、凹凸を其儘に現し、恰も裸體を見るが如し。電氣應用を以て、彩色を施し、人足をこゝに止むるは、寧ろ之を敢てするの婦人を憐まざる可からず。

饑えたる婦人は、凌辱を忍んでパンを得ざる可からず。今や、それすらも能はざるに至れり。千有餘人の婦人は、これより饑え泣かざる可からず。凌辱を忍び、饑えに泣かざる可からざるものは、豈にたゞに千有餘人のみならんや。

饑餓

有秋生

「一」

『何うだ、徐々出掛けやうか』

『飢』の一個が言ふ。其牙は狼の如く、其双手の爪は、宛然に虎の樣である。

『うん、出掛やう』

石炭の樣な眼を輝かして一個が答へる。

『何うだ、昨夜は持たか』

『持てるも、持てねえも無え、から話にならねえ。お前は、』

『いや酷い目に遇つた。對手が會の社會主義者だらう、小理屈計り捏やがつて、始末に終なかつた。』

『今夜は何處へ出掛る積りだ。』

『乃公か、乃公巣鴨の監獄だ。』

『巣鴨の監獄！妙な處へ出掛るぢやねえか。』

『不思議は無やね、ストライキで三百人からの減食があるんだ、政府の方でも少々は費用を出すから是非出張して與れと云ふ命令だ』

『ほう、其つあ豪氣だ。乃公の方は、今夜は辛と一疋だが、別嬪だから我慢せうてんだ。』

『何處だ、兄弟』

『鮫ヶ橋よ、新らしく建つた御所の直ぐ下だ』

『新造か、年增か、一體幾歳になるんだ。』

『時宜に由つちや、取つ換て貰はねえとも限らねえ、』

『幾歳になる？は、十七だ。』

『名は？』

『名か、名は春枝さん』

『春枝さん！好い名だ、其で齡は十七！何でい、兄弟、一夜取つ換いて貰へめへか』

『好いとも、ぢや、代りに乃公巣鴨へ行かう』

『ぢや、乃公は鮫ヶ橋へ』

『行う』

『行う』

欺された『飢』の一個は、肺病やみの少女とは知らず、暗の衣に人目を隱して、足を空にすらすらと、走り出た。

「二」

巣鴨監獄には四名の社會主義者が、朝憲紊亂の罪科に依つて入監して居る、中にもストライキの記事で有名になつたストライキ先生などいふ豪傑も居る。であるから、監獄では密にストライキを懸念して居た。天長節の晩のことであつた。其夜夜會の催がある云ふ森外務大臣邸では、花飛び香水の雲立ち昇る許りに、朝野の貴紳淑女を以て滿された。

恰度某の宮妃殿下が、畏れ多くも、某外國大使の手を執られて、舞踏の一さしを舞れた其刹那の事である、亦露國では首相ストリピン邸に何者かゞ爆彈を投じた其刹那の事である、遙かに巣鴨監獄の南監の方に當つて一整に鯨聲が起つた。其は囚人の一部がストライキを決議した合圖であつた。

果して翌日になつて工場三百名の囚徒は就業を拒絶した。其處で典獄は罰として彼等に各平食三分の一三日間の減食を宣告した。

是を仄かに臭ぎ知つた『飢』の一個は、扨こそ玆に巣鴨行を決行したのである。

然し、元來が、饑餓ストライキをすら遣りかねまじき連中であるから、少し許りの苦痛には慄ともせぬ、折角攻めに行つた『飢』も、忽ち失敗して了つた。『是ぢや肺病やみの春枝さんの方が好かつた、』と、内心では大に後悔、人を咀へば穴二つ、惡いことは出來ないものだ。

「三」

今一個、彼鮫ヶ橋の少女春枝の許へ行た『飢』は何うしたであらうか。

春枝は早や四日間一粒の米すらも咽に通さぬ、死人の樣に飢で藁の上に仆れて居る。彼女は已に五ヶ月の間肺病で寐て居るのである、唯だ一人、十二になる弟が、諸方で食物を盜んで來て食して居た爲めに、漸く今日まで露命は繋いで居たもの、四日程前に、其弟の三吉が警察に捕はれて以來は、春枝は全く飢に惱まさるゝことゝなつた。搗て、重病の身の彼女は、此四日間、飢と病苦の爲め、昏々として、殆ど生死の境を忘れて居た。天長節の晩は實に彼女が病苦の絶頂であつた。

今しも、春枝を訪づれた一個の『飢』は、破れ茶碗の水に混じて、巧に少女の腹中に入つた、而して猛烈なる慾望の牙を鳴し、王者の如き暴力を双手の瓜に凝て、哀れな少女の腹中を目茶目茶に掻き裂いた。

無殘やな、花の十七、戀知る間もなく、春枝は、遂に果敢なく死んだのである。一人の慰藉者もなく、一人の看護者もなく――。

。　。　。

次の夜、暗の衣に人目を包んで再び會合した二個の『飢』は、何を話したであらうか、是非聞いて翌朝の新聞の材料にし度いものである。（了）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

悲劇物語

上　　渡邊　博

この世の中で尤も弱い者は、何であるかと問へば、それは昔時の人も云はれた如く、女である、その女の中でも、わが村のお妙さんなとは、こゝに謂ふ弱者の末族に、眞切に符まる可き女であらう、何故ならばとの疑問を起す讀者は、先づ下に記す物語を讀めば、成程と頷かれるに相違ない頷いて而して可哀相だと思はぬ讀者はなからふ、如何な情に剛い人でも、必ず涙を流して、世間には、こんな事柄もあるかと思ふであらう、斯く筆を持つて事の顛末を語らんとする余自身も、謂ひ知らぬ悲哀の感想に打たれるのだ、あゝ憐れむ可き弱者の位置にあるのは、お妙さんである、余が悲劇物語と題したのも、強ち誇張ではないのだ、然らば、しかく、哀感を催うさしむる、其物語とは何んであるか。

靜かな、利根の流れを、背に受けた、境町を約十町も北へ辿ると、お妙さんの村里が沼の對岸に、繪のやうに見えて來る、三年前まではその繪の中から白い手拭を冠つて赤い襷を懸けて、草籠を背負つて、堤傳ひに波打際に降りて來る女があつた、是が則ちお妙さんで、雨の降る日も、風の吹く日も、お妙さんは、この沼の邊に來て、草を刈り、藻を取りなどして居た、お妙さんは一日逆遊ばない。

お妙さんの家は、土地でも屈指の農家である、お妙さんは、極小さい時、母親に死別れて、いまのお母さんが來る前までは、父親を世間並にお父様〳〵と呼んで、非常に親思ひであつたが、今では兄さんと呼び、新らしい母を姉さんと謂つて居る、お妙さんは后にも、前にも、タッタ一人の娘であつたが、今度のおつ母さんが嫁つて來てから、二人の妹弟を持つた、性來親切なお妙さんは、今の母親を姉ざんと呼ぶけれど、心には毫も隔意を置かないで、眞個の母親のやうに、何事にも溫しく、何事にも唯々で稼いて居つた、況してやその二人の妹弟に對しては、痒い所へ手の届くやうに、世話を燒いたのであつた。

母親極似で、顔立が美人で、優しくつて、親切で、好く勞働と云ふので、お妙さんを褒めぬものは、誰も無い、寄ると觸ると村の誰彼は、孝行娘よ、好い女よと褒そやす、であるからお妙さんが、妙齡になつたのを見て、甲乙は、嫁に欲しい、聟をとらねかと、緣談を持込むのであつた、あの娘のやうな女を嫁にして、一日でも宜いから、嫁よ、姑よと呼ばれて見たい、とは何れも可愛い息子を持つた母親達の述懷であつた。

こんな工合に諸々方々からの緣談は、丸で雨後の筍のやうに澤山あつた、その度毎に父親はお妙さんの氣を引いて見た、が、お妙さんは何故か不承知であつた、何うしてかと訊くと、未だ年齡が若うムいますとのことだ、お妙さんは、其時二九の花盛りであつた。

年齡が若いと謂つて、雨と降る緣談を斷つたお妙さんの心の中には、已に或る戀しい人が、深く〳〵刻まれてあつたので、若いたしい潔い、初戀の炎は、お妙さんの小さい胸に宿つて居た、あの人ならばと思はぬ日は一日逆無い、その戀しい人と謂ふのはお妓さんの隣村の庄屋の息子で沼の此方の岸近く斷斉と繋つた、森陰が、その人の家で、名を俊一と謂ふので、男の方でも、女を可愛いものだと、早くから其の境遇に同情の油を注いだので、斯くと知つた、お妙さんの胸に燃えてある、戀の炎は、頓がて、身をこがす程になつた、兩人は斯くして戀し合ふのであつた。

中

明治は某年、お妙さんは花嫁となつて、沼を東へ渉つて、俊一と同棲することが出來た、お妙さんの嬉しさ、俊一の喜びは一通りでなかつたが、男女の喜悅に引換へて双方の親達は、澁い面をつて居た、元來ての婚緣にはお妙さんの親達も、俊一の兩親も不贊成であつた、お妙さんの親達に言はせると、隣村ではあり、庄屋と謂ふやうなものの、剛慾で、非道で、家内中皆揃いも揃つて人情も義理も、辨へぬ奴等だ、そんな鬼の棲家で、もあるやうな處に、何うして可愛い娘を嫁つて、一生泣の涙で日を送らすことが出來ようとの事で、亦俊一の兩親は、根が恰好な、發明な、評判のお妙さんでは、自分等の嫁女として術が勝過ぎるので、親達は一寸面白くないで、やれ血統が何うの、彼うのと、ありもせぬ難癖を付けて、不服を唱へたが相思の男女は、こんな異議に何うして、耳を傾けよう、若しこの戀が破れでもするならば、いつそあの世でと、あわや、沼の藻屑ともなり兼ね間敷、男女の勁節に、其處は親と子の間、それなら若い者同志の望み通りに仕樣と、茲に三々九度の杯を擧げることゝなつたのであつた。

斯して、男女は鬼にも角にも、思ひ通り夫婦となつて、只管甘き蜜の如く、戀に醉ふて、世は霜枯のうら淋しき時なれど、男女の胸には、習々と春風香うて、温かき血潮が通ふ、けれど、春は永久に續く可きものでない、男女が唯、若き〳〵華かな青春の戀に醉ふて、前後も知らず恍惚として居る中を、心無き運命の神は容捨も無く引放すのであつた。

曾て徵兵檢査に合格された俊一は、この年の暮近く、北海道旭川第七師團へ入營することゝなつた、俊一は嫌でも可愛いお妙さんと暫し別れねばならぬ、お妙さんも亦同樣淋しい孤獨の身とならねばならぬ、三年の月日、口でこそ三年と云ふけれど、男女は待つて見れば隨分と長い月日である、男女はその間、別れて居ねばならぬのだ。

明日出發と云ふ前の晩であつた、男女は背戸から手を執り合つて、沼の岸へ下り立ち其處に繫つた舟を解いて、中流へ出た、男女はかくて、人目を避け乍ら、盡せぬ別離の涙を、絞つて、絞つて、絞りぬいて、サテ女は男を凝と見やつて、では、お身體に氣を注けて、ね、私は三年の月日を、何んな辛い、情ない悲しいことがありなさるとも、耐えて、忍むで、待つて居ります、お還りを待ちますから……跡は涙にかき昏れて聞えない、女の絕え入る計り、泣き沈むのを、男は凝と見下ろして居たが、軈がて聲も濕んで、妙さん、安心して居て吳れ、己も男だ、親が何と謂はうと、妙さんを捨てるやうな事はしないから、可いかい妙さん、留守を依賴むよ、男女は何時も、泌々と語り合ふ。

下

嫁と姑は何故か、反目する、互に睨み合ふのを例とする、孰れか、惡いか、善いか今茲で喋々するではないが、お妙さんの舅姑のやうな人間は、亦餘り類の少ないものと謂はねばならぬ、自分の可愛い息子が滿身の愛を注いで居る嫁であるから、左程憎くない道理であるのに、何うしたものか、酷だしい虐待、餘外の見る眼も哀れの悩い遇い樣であつて、犬猫にも劣りであらうとは近所隣の噂であつた、お妙さんは、わが父親の謂はれた言葉が成程と感せられた、だけど、この辛さ、この苦しさも、あの人があればこそと、固く覺悟して居つた。

殉に女乍らも健氣なもの、その戀しい人の面影を幻に浮べて、早く還つて頂戴と、心の奥の奥で囁きもすれ、口唇へ出しては、一言たりとも女々敷言を語らぬ。

女は斯くして、日を送り、月と暮して居る戀しい人の父は母は、姉は妹は、時折、眞綿で針を包んだやうな言辭を口唇にして、女を罵り、憎み、輕蔑む、優しい女は何んなことを謂はれても、たゞ默つて耐えて居る。

一年は過ぎた。

この間、隊の俊一からは、一月に二回位宛必ずお妙さんに宛てて、手紙を寄越す、何時の手紙にも、妙さんを思はない日はないと書いてある、あゝ嬉しい、女はこの何に接する度その、人の面影を幻に思出して、思はず斯く叫ぶのだ、家人の虐待、嘲罵が其の繊弱き一身に降り來る毎に、女はこの戀しい人の手紙の文句を繰返して、凝と耐え忍ぶのであつた。

二年は過ぎた。

女は相變らず辛棒して居る。

三年と爲つた。

女は吻と吐息して、指折數へて見ると、夫の歸鄕の日は、あと二ヶ月を越せば、あゝ後二ヶ月、この二ヶ月であつた、戀しい、戀しひ人に接し、相見え、手を執り合つて嬉し泣に泣くことが出來る……と女は今更の如く謂ひ知らぬ嬉しさが込上て來る。

憶へば三年の月日、吾ながら好く耐え忍むだものよ、その間に起つた、悲しさ、口惜しさ、一々をかの人に打明けて見たなら、何んなに驚くであらう、何んなに情なく思ふでせう、とお妙さんの思ひには、早くも、飛んで越方、行末を辿る。

浮世とは好く穿つた言葉、お妙さんが三年の辛苦を凌ぎ凌いで、わさ僅か五十日餘で戀しい人に會ふことが出來る、その身の上に湧いて起つた災難と云つてもホン〳〵過失、義妹が今度東京博覽會見物の爲、上京するとかで態々着物の新調、やがては長戰になる可きその反物を、お妙さんが少し許り裁ち違つたので、何か事あれかしと待ち構へて居つた姑は勿論、家族打揃つてお妙さんの惡口、揚句の果が出て行けがしの口振、餘りの事に、耐忍むだ胸の思が切れて、一言二言、お妙さんが口返したのを根に持つて今度は可哀相に、親類立會の上離緣沙汰、併し……(以下七面の下段へつゞく)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

友社の消息

石川三四郎氏の書面

貴兄御無事の由欣賀△当る廿二日の公判又々延期となり僕は少からず失望して居つた次回には延期にならぬ様にしたい△才判の事や其他少々相談したい事がある近い内に來て呉れるとの此端書に由り樂んで待つて居る△監獄生活は大兄も既に實驗したのだが近頃は一層改良したとのことだ殊に食事なとは東京監獄に比して數段の精選を施して居る様に思はれる△併し規則は仲々に厳重なもの起床、就寝、食事、運動、入浴より出入進退まで皆な號令の下にせねばならぬ僕等は實に一切他力の生活をして居るのだ△社會に居る人は獄中にて嘸ぞ退屈するであろうと察して呉れるが今の處では仲々退屈處ではない此の魯鈍な脆弱な身にも重い任務を負ふて居ると思へば一刻も愁然として居ることは出來ぬ讀書に冥想に種々な養生法に僕は相應に多忙を感じて居る但し先月初旬少しく頭腦を損ねて讀書の出來なかつた時は少々閉口した△入獄して少し意外に感じたのは精神的の戰ひが一切消え失せたことだ是れは社會に居ると常に罪惡を目撃し罪惡に遇ふのが獄中では唯だ將來の希望に充され、聖賢の言行を味ふて居る爲めであらう但來秋の默想の好時期にもならば心中多少の苦悶を現ずる事と樂んで待つて居る是れは僕の秘密△先々月來讀んだ書物を御披露しやう Russian Nihilism. The Russian Revolutionary Movement, Naturalism and Religion. Mutualaid 先哲叢談、輸円寶鑑 Father and Son など、明日から Conquest of bread にかゝる積り△露國の歴史に多大の興味を感じて來た、Memoir of a Sportsman（ツルゲネフ著）Public and serf（之は新刊もの）を見附けて差入れて貰いたい、餘り逸見君にばかり手數をかける故、今度は方向を轉じた、筒子夫人よろしく願ます△レーの書でラサール傳を讀んだ彼も難て偉き人物だ△谷中村遂に氣の毒な最後になれる由は僕大に論じたくて胸がムカ〳〵して居るが今は自由を持たぬ唯だ一言する谷中村決して亡びず一粒の麥粉として地に落ちしのみ△先達而は片山氏が面會に來て呉れたアノ時僕は何だか涙がセャ上げる様な氣がして堪らなかつた入獄以來初めてのことだイヤな顔を見せて同氏には失敬した深く謝す△安部さんに申す貴書の時機は是非御始めを乞ふ、そこで逸見君が讀か精細に筆記して貰いたいものだ△墨堂和尚の書面は僕に多大の力を與へるドウカ度々林泉中の御味を書き送つて貰ひたい△村田君に申す御選挙延引して濟みません又た今日となつては選挙もイヤますまい△小野君の不合格何より幸出度い慶賀々々△赤羽君に度々書面有難う出獄したら是非君の地方へ行つて見たいと思つて居る

石川三四郎

友人　堺利彦殿

●上司小剣氏より　原稿も其内何か書きます、チト目黒へも御遊びに入らつしやい、秀湖は僕と同居しました

●赤羽一氏より　炎暑の砌り御障りもありませぬか、私は心身共に餘り不健康で閉口して居ります

●小岡抱雨氏より　數ならぬ小生へ種々御芳簡を給はり只管東向拜謝致居候、猪野山貴誌を悪まれ主義擴張に御焼心の段敬服の外無之候、何卒御遊察の程奉祈候

青わらし吹くに任せて飛ばん哉

切角御恵送貴誌も御承知の通り北陸の地は舊守頑迷の徒多くして空谷跫音を絶例し居る位五六部配布し他は小生の友人知人に送附致し置候、この冊子の何時を待つて萠芽するか頗る怪しきものに候右御回信旁如斯御座候

●内山愚童和尚より　此程の御様子は如何であります、主義の爲め獻身的の御奮闘もさることながら先日逸見君の御話しでは今年は餘程あまり勝れずとのこと吾人の戰闘は永遠でありますから静養するのも主義の爲めと存じます、土用前は涼しくありましたが、こゝ二三日はメツキリ暑くなり東京の同志諸氏に獄中の人々が思ひやられます、仕事を、さしくりして此涼しき天の賜たる函嶺の地に暫時静養せられよ、先日西川君へ送金の際雜誌代登開送りましたが届きましたか

讀者の書信

拜呈

時まさに炎暑貴様御壯健に渡らせられ候か御伺ひ申上候私事無事消光まかりあり候間他事ながら御休神下され度候

さて申上ぐるも甚だ遺憾に存じ候へ共當校にては非常に主義に對する注意厳にすぎるために一時新聞購讀を中止するの止むなきにいたり申し候私の熟推いたすに郵便局などへ内々教師より願ひ置きし故と察せられ候、宿舎の一教師の同情により幸に事なきを得申候まりとて決して主義を捨てしものにては御座なく候間其邊は御掛念下さるまじく候、今年の暑中休暇にて歸省いたし候間失禮に候へども

新潟縣三島郡出雲崎住吉町 番地けい

あてにて八月一ケ月と九月一部御送り下されたく御願ひ申上候

その後はしばらく御發送御見合はせ相成度いつの世にか多くの同志諸君と相見の折とたのしみ居候

皆様御身御大切に遊ばされ度願上候かしこ

七月十七日　〇〇〇

世界婦人社御中

毎度世界婦人御送附下され我等囚徒の如き冷かなる寄宿舎生活の身も貴紙の恩惠に浴されて今日まで經來り候、しかるに此度御送り下されし世界婦人は小野七造方とありしも當校より郵便局へ手をまはしたらしく當局より當校さしく舎まはしとなり遂に舎監の陰險なる術中に陷り申し候

追害は單に此度のみならず當年二月當校生徒はアル一事より教師と衝突を起せし結果同盟休校と相成候際はしなくも我等同志は主謀者と目され校長はかく女子に未曾有の暴擧を敢てするは社會主義などいふ危險なる思想を有する生徒のセンドーに依るとなし我等同志は此際已でに平民新聞世界婦人は當局の宣告を受けしものにて候、しかしながら校長の説法も形式的處分もタナイキノニフタに過ぎず却つて反動としてストライキ後火山的才物は續出いたし候ものから舎監は百計盡きて遂に郵便局配達夫にまで手をまはし、ものと推察いたされ候、勿論此度は我等が身上に打撃の振りかゝるは覺悟にて候へば引つゞき拜讀いたしたく候へども途上の如き次第にて沒收されては誠につまらぬものにて候へば今後當地を去るまでは暫時發送止めにいたし下されたく表面の名前もかくの如くにて候へばもしや貴社に届かざるかを慮つてかく變名にいたし候我等は今後暫し貴紙に見ゆるを得ざるも貴紙に與へられし信念は永久に失するものにてはこれなく他日片手に提げて社會の陣頭にのぞむべく思惟いたし居り候

さらば世界婦人の御健在なれ

新潟縣長岡女子師範學校寄宿舎

北見くら

世界婦人社御中

嗚呼長き〳〵眠りに虚榮を夢み黄金を夢み權勢を夢みたりし姉妹諸君よ、御身等は最早や覺めざるべからず、御身等の毎日孜々汲々學びて智識を研磨せん其目的は、五千年來長き脊髓の夢を實現せんとてか、姉妹を教育するてふ美名の下に如上の陋劣なる處置は學校に於てなされつゝあり、世界婦人は果して社會の秩序を紊亂すべき破壞の行爲を以て世の姉妹諸君に見えつゝありや否は其の筋に伺つて、大いに質問せざるべからず（記者）

（六頁よりつゞく）

隊に居る夫には何の通知も相談も無く、口惜しいやら、雨しと〳〵と降る夕暮、俯くと招を西へ、突切つて吾家へ還る途中、東の中央線にて、残りの者の眼を掠めて、雨と水へ飛び込んだが…………此れ切れず、はり裂け相な胸を抱えて、辛くわが家の門を跨いだ、お妙さんは、直ぐその夜から病の床へ就いた。

わが故郷に、こんな悲劇が演ぜられたとは露知る由もない俊一は、満期の賜暇で、父よりも母よりも、先ず戀しい、一刻も忘れやらぬわが妻に會つて……と急いで郷里へ立還つたのが、この悲劇のあつた翌日、折も折わが兄が突然の歸宅に、驚いて怪しみの眼を見張つて出迎へた家族の面々に、俊一は赤塗期したその女の影も形も見えぬに是も一方ならず怪しむで、次第を訊けば待つて居たと謂はぬ計り、両親は右と左から俊一を圍んでゐる事、ない事取交せて、お妙さんの醜跡、言うかへ、そんな事をする女とは知らなかつた、と早くも両親の甘言に欺かれて、罪も無い吾が妻に濡衣着せる浅間敷さ、俊一は遂に浅薄にも親の所為に盲從して三年の間、骨身も惜まず、わかれゐる爲に、身を働いて與れた可憐のお妙さんには一言も與れず、舟の中で誓つた言葉も打忘れて、其儘、隊へ還つて仕舞はれたので、人の皆口に斯くと聞いた、お妙さんは口惜しいとたゞ一ト言、跡は瀧の如く涙を流して、枕も爲に流れ相。

あゝ、お妙さんは可哀相だとは、誰も皆言合はしたやうに口から口へ、そしてかの男の心變りと、男の両親とを憎まぬものはなかつた。

お妙さんは今でも病床の人であるのだ、あゝ、哀む可き女は、再と健全なる身となるを欲はぬであらう。（完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十二錢

本舗　ライオン歯磨發賣元　東京神田柳原川岸　小林富次郎

文學士　倉橋惣三君編　●基督教こどもの本　第一編「いらくさ」第二編「なみ子のいす」以下順次刊行　定價六錢　郵税二錢

文學士　小山内薫君著　●新體詩集　小野のわかれ　定價二十錢　郵税不要

中村春雨君著　●繪入キリスト物語　定價十二錢　郵税不要

宮川巳作先生著　●加拉太書研究（近刊）

松本雲舟君著　●女流文豪　ジヨルヂ、エルオット（豫告）　附錄　アダム、ビードの梗概、サイラス、マアナーの梗概

注意……御注文の際は最寄郵便局にて振替貯金の用紙を貰受け表面には御送金の價格を裏面には御用向を御記載の上振替貯金口座六三三〇番中庸堂宛にて御注文被下候はゞ一々端書を御差出なくとも御用向は辨じ御送金は無料僅か手數料二錢にて然かも安全に弊店へ屆き申候

發兌　東京神田表猿樂町二十五番地九段通　中庸堂書店

商店改築大擴張

カルタ歯磨は　口中にある諸種の細菌を殺します
カルタ歯磨は　歯牙のゆるみを緊縮するの効がある
カルタ歯磨は、口内の惡臭食物滓渣の腐敗を防ぐ

絹手巾　造花類　西洋小間物　種々

東京市京橋區尾張町二丁目八番地　光明堂　電話新橋二七六七番

カルタ歯磨は　アルカリ性なれば口内醱酵を防ぐ
カルタ歯磨は　最も微細の粉なれば歯を磨耗せず
カルタ歯磨は　常用すれば口腔歯牙の諸病を防ぐ

根本正君譯　片岡健吉君序　**日々の力**　紙表紙三十五錢　クロース表紙五十錢　郵税六錢

本書は一月一日より十二月三十一日に至る一年三百六十五日間に於ける居家處世の大本を示したるものにして、毎朝其當日の部を一頁宛讀むべきものとす、世人之を繙いて反覆讀誦せんや、新氣力新生命は自ら其の間に生じ來りて無限の快を得べし、故に聖書と等しく一般家庭に必ず備へられんことを推薦す。

日本メソヂスト監督　本多庸一先生　**説教集**　紙質精撰寫眞入　金六十錢　郵税八錢

是れ本多先生獨特の通俗的思想を以て深遠の眞理を極めて平易に懇切に説き去りしもの、今日まであり ふれたる翻譯的口吻なく先生の特創の思想を以て日本の人情に投合し、一言一句鮮明々として感興措かざらしむ、請ふ一本を座右に置かれんことを

パウン博士著　小山正武氏譯　**基督教天啓論**　一名宗教研究の要領　定價金二十五錢　郵税金四錢

今や世界生存競爭の洪潮大浪は彌々益々激甚して地球を震撼しつゝあるにあらずや、此の大試煉に遭ふて屈せず撓まず奮闘猛進、向上して以て善々其の靈的生活を完ふし以て善々其心靈の平和を永續し得べきの途は他に非ず唯教法を以て聖書を活讀し、之を實行するにあるのみ、パウン博士の此著は簡明、聖書研究の第一義を示せる者にして今日初心信徒の爲めに不可缺的指針と爲り燈臺となるべきは此書也

ジヨン、アール、モット氏述　瀧浦文彌君譯　**活ける基督信徒**　定價金三十錢　郵税四錢

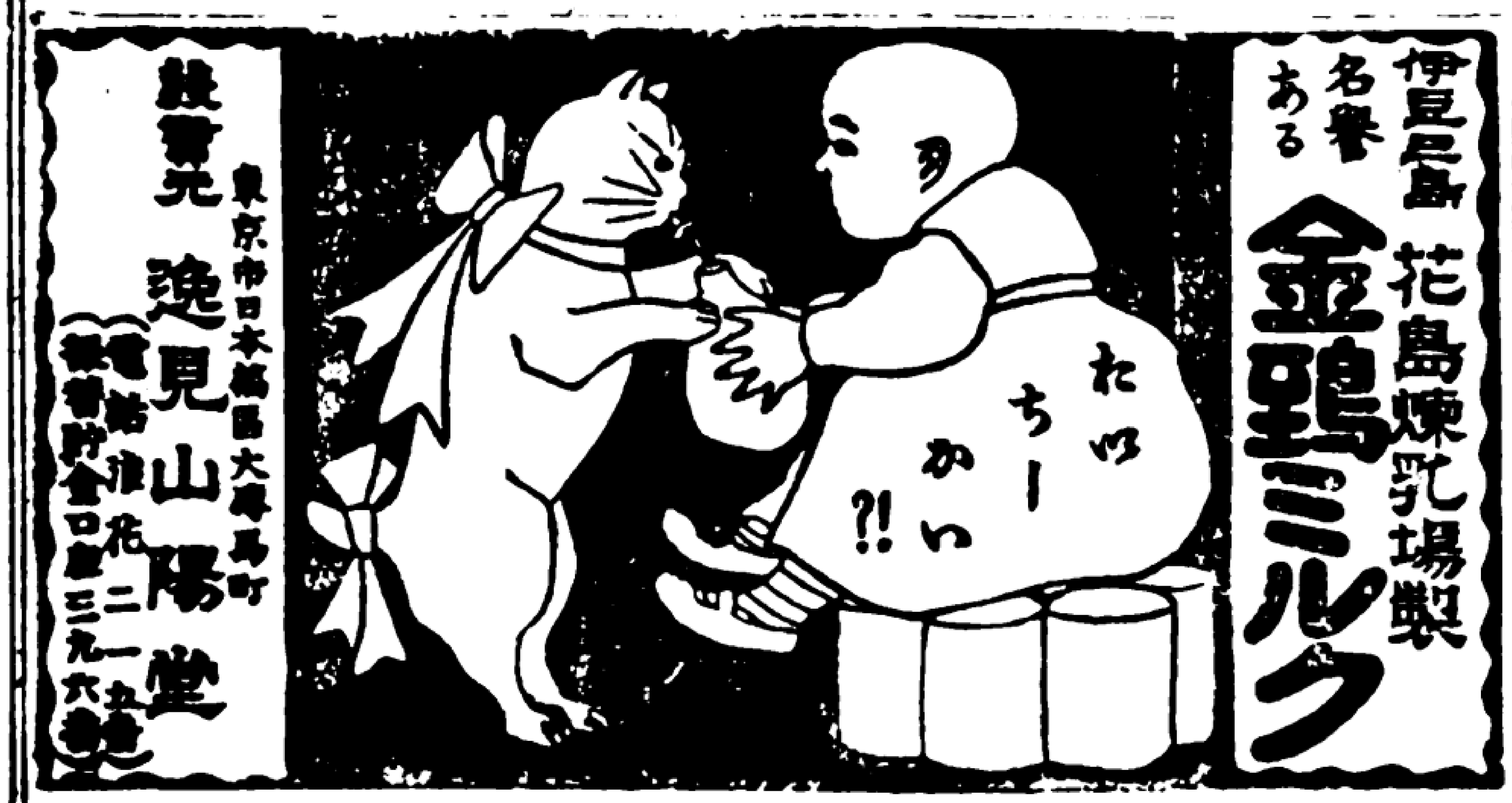
救治家庭モット氏を知る者は多し、而かも靈活の氏を知る者少し、氏が十餘年青年事業としての經驗見聞に基きし本書は、其の偉大なる人格の反映なり、發斯なり、之に依りて其の今日あるに至りし所以を悟る時人は、身に少なからぬ感化を認めざるを得るべし、敢て讀者の購讀を乞ふ

ジエ、ルドン氏原著　英山婦人、田中於菟女史譯　**七日間**　定價金三十五錢　郵税金四錢

道に迷ふた人の子が、たうとい愛の力によつて教はる、世にも美しい物がたりを、讀しいて筆に寫し出した此の本は、今の讀みものとして極めて適當なものでは御座いますまいか、迷ふ人も救はれた人も是非一度は御讀みなさい、せめてその小さい一册の中に深い敎へと盡きぬ慰めとを御見出しなさるならば譯者二人は苦心の空しからぬを喜ぶで御座いませう

其他諸大家の名著澤山有之候品切にならさる内至急御注文を乞ふ

内外書肆　東京銀座四丁目　教文館　電話新橋二三二六



國木田獨歩著
再版　**武藏野**　定價廿四錢　郵税八錢
再版　**濤聲**　定價十八錢　郵税六錢
東京神田表神保町　彩雲閣　振替口座一〇五

●歯科治療●　自午前八時　至午後六時
齒科醫　吉瀬才市郎　東京神田須田町二十六番地
●學生勞働者諸君に限り藥價手術料共半額●晝間執業者の便を計り夜間十時迄治療仕候

新築落成移轉
内科　小兒病　外科　診療
府下淀橋町角筈（水道前）　淀橋醫院　竹下繁太郎

應需　肖像畫
神田區美土代町一番地　浦田鳥城

小兒科　内科　婦人科
每日　自午前八時　至午後六時
淺草區馬道三丁目　小牧醫院

◎定價　△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢
△申込は總て前金の事　△郵税當方持
發行兼編輯人　東京府豊多摩郡　神崎順一
印刷人　遠藤友四郎
發行所　世界婦人社
印刷所　東京神田區　博眞堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY